槐（かい）

岡井省二創刊

平成26年5月号

平成二十六年五月一日発行　第二十四巻第五号　通巻第二七五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

迷宮

高橋将夫

結界も津波防ず蕗の薹

一粒の種一滴の春の水

竹林に入り散りぢりとなる春日

なにげなきその一言が春愁

PDF= 俳誌の salon

フロイトの深き眠りの春の夢

春の水若く映してくれにけり

鞦韆を揺らしてくれる孫がをり

春星や人類たかが千万年

本人のやる気が全て上り鮎

白板は全てが余白のどかなり

抜けてみれば迷宮はただの春野

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

鳥たちの愛語春待つ心あり
冬帽子振り返るなく立ち去りし
海冥く鳥ごゑ遠き涅槃かな
夢にふと若き日のあり雪の果
子規の俳郁乎の諧や別れ霜

加藤みき

約束を守り切つたり落椿
スノードロップを捧げたき人ありにけり
春の宵ドア・ノブに袖引かれたる
春浅し遠きより見え日章旗
遣らずの雨狐の牡丹咲き満ちて

中島陽華

かりん糖噛むや一陽来復す
引出物は背戸の小籔の笹子かな
うかともの食べて歯抜けに春立ちぬ
暖かや般若が口を開けてをり
結び合ふ大岩小岩初茜

竹内悦子

白墨の手を洗ひをる水仙花
立山に雪積む貴人畳かな
鉛筆と転た寝したる春炬燵
新しき靴買ふ八十八夜かな
立春大吉大原の紫蘇ビール

PDF= 俳誌の salon

雨村敏子

二ヽ月の岸辺アダムのにほひする
色紙短冊ひとり一人の春景色
二夕言三言貌が朧となりゆける
ふぐと汁一味七味と騒ぎをる
双ヶ丘に男ありけり夜の梅

本多俊子

うすらひの割れ目の水に光負ふ
惑星の一つに生れ春菜摘む
妙なるや白梅仰ぐ如意宝珠
涅槃会や近づいてくる白い雲
ゆく雲に心を乗せん春の風

近藤喜子

引鶴の声に祈りのありにけり
蛇穴を出づ玄室の闇を曳き
我もまた時の旅人上り鮎
翼たたみ子の帰りくる春の夕
春雪や書き終へし万葉秀歌

瀬川公馨

春霰のぽんぽん走る土の上
貪婪な口をもちたる朧かな
風韻とも石の衣手春の雪
偽物の春に誘はれ雀躍りす
侘助やオリンピアンの何処なる

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

就寝のわれにかしまし恋の猫
鶏鳴にはなやぐ小屋の寒卵
筧より水ほとばしり梅震ふ
しぐれ打つ暖簾の雫拂ひ酌む
お山焼き火勢はつひに闇に消ゆ

中野京子

父母の空福寿草の全開す
冬麗の羽衣一枚女には
同穴にやさしき日脚のびてくる
銀色の冬芽ふつくら如来かな
早暁のやはき雨音春や立つ

柳川晋

凍返る地軸をトンと押してみむ
良し悪しは言はず語らず山笑ふ
春日影地蔵の左手より零る
春塵や祀る外なき崇り神
思ひ出は春日のなかの顔ばかり

岩下芳子

三輪山の麓でこぼこ桃の花
湖の懐に入る雪解川
そこここに蜆こぼるる雑魚場かな
天王寺七坂渡る涅槃西風
初蝶のいま飛ぶ時と思ひけり

PDF= 俳誌の salon

近藤紀子

春浅し神獣鏡に壽の字かな

種芋の芽の桃色や日の中に

水餅をまづまつ白の布巾にて

鍋奉行にまつろはぬ者多きこと

子の忌修す冬の銀河のことに美し

PDF= 俳誌の salon

槐市集

中島昌子

円墳に土筆顔出す兼好忌
歓声やフェリー接岸島の春
対岸は人の声する花菜畑
恋猫に耳ピクピクと眠る犬
春の雪フォッサマグナを境とし

中田禎子

朝刊の遅し桔梗の芽の揃ふ
御猟野乃杜春泥の小径かな
御猟野乃杜（みかりののもり）＝近江八幡市加茂
芋の芽や地平の先のオホーツク
健（したた）かに生きる約束桜草
春泥やおのころ島の人と添ふ

中谷富子

飛び立ちし鳥に万両揺れやまず
寒念佛袈裟ひるがへし尼僧くる
いかだ舟ゆれて早瀬に鱵くる
佛にも晝酒少し雛の客
旅終る丁度白菜漬かる頃

中堀倫子

川波にあたたかき雨の速さかな
冬菊や青菜にまじりそぞろゆれ
朝霜の帽子を被る車止
工事現場防音壁の三が日
北風やちぢめたる身に入り来る

PDF= 俳誌の salon

中道愛子

娘に送る荷物の隅に年の豆
床の間に利久好みの白椿
九十九里の砂に足跡浜千鳥
灯台や潮の匂ひの水仙花
畦道の小さき流れ春の川

橋本順子

大切なことば待ちをり梅開く
雪解道子らもつれつつ帰りける
ゆつくりと土を潤す春の雪
雨垂れに飛びついてをる子猫かな
雪折れの枝の断面茜さす

前田美恵子

寒靄を破りて馬の嘶けり
赤土にひび割れ数多春きざす
ものの芽の光る小雨となりにけり
湖に行け伊吹山を駆ける雪解水
下萌のそこだけ色のやはらかし

柳橋繁子

揚浜に寄する荒波虎落笛
介護保険証届いてをりぬ春うらら
おのころの神の恵みよ河豚づくし
さりながら見立て確かな花衣
草萌えの段々畑地震のあと

山田佳子

日向ぼこ心の隙間温めて
開け閉ての音響かせる寒の朝
嬉しきも憂きも言の葉かげろへる
春社日卍崩しの勾欄かな
春雷や今日はまだ来ぬメールかな

吉田順子

紅梅や朝の微光の中にをり
猩々袴沢よみがへる水の音
老樹とてまだ力あり梅開く
潮満ちて風満ちて鴨残りけり
潮風に乗るまで重し春の鳶

PDF= 俳誌の salon

槐集

白梅を見てゐて空の暗くなる　枚方　熊川　暁子

枯芦のなほ立ちゐたり火となりて

日当りの石に坐したる寒さかな

一山の末黒まとひの芽吹きかな

西行も母も混じりで春の土

深山の呪縛解けたり雪解川　岡崎　岩月優美子

魚は氷に上り眩しき風の色

雪解や大地の呼吸聞えたり

人生に濃淡のあり梅三分

愛憎や菠薐草の茄で加減

卒園の子の真しぐらに母の胸　京都　竹中　一花

天竺の岸に着きたる蟇（がまがえる）

囀を吸うて肥えゆく大地かな

貝寄風や男の子に頼む野菜買ひ

菜の花を追うて越えたる橋二つ

高橋将夫選

西行に誘ひ込まれし花の闇　寝屋川　前田美恵子

藪椿垣間見へたる浄土かな

一掬の水を賜はる浅き春

静寂に色は無かりし春立てる

春寒し盲導犬の赤い服

水といふ畏ろしきもの冬の滝　大阪　江島　照美

月冴ゆる戻ることなきかぐや姫

豆撒きに我を忘るる心地良さ

福笹の小判を増やし夫帰る

幸せの形いろいろ春めけり

太古地球に生れし空よいま春に　有松　洋子

大空の果ては漆黒梅白し

ほんたうは風に溶けたき風車

春北風や火刑にされし切支丹

花菫地上に神の降りたまふ

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

枯芦のなほ立ちゐたり火となりて　熊川　暁子

炎に包まれながらも、まだ直立している枯芦。最期を全うする枯芦の衿持の姿がそこにある。

〈白梅を見てゐて空の暗くなる〉の句の「白梅を見て暗くなる空」、〈日当りの石に坐したる寒さかな〉の「日当たりの寒さ」はいずれも物事の本質に迫っている。〈一山の末黒まとひの芽吹きかな〉の「末黒まとひの芽吹き」は巧みな表現。〈西行も母も混じりて春の土〉の句には母への深い思いがこめられている。

深山の呪縛解けたり雪解川　岩月優美子

深い雪に閉ざされていた山の雪解け。呪縛が解けていく心の姿ともいえよう。〈人生に濃淡のあり梅三分〉は、これからの喜怒哀楽の人生、「梅三分」の今が一番ほどよい時期なのかもしれない。

天竺の岸に着きたる蟇　竹中　一花

蟇が天竺の岸辺に着いたという。着いた理由をあれこれ想像するのも面白いが、ともかくこの発想に脱帽。俳諧。

静寂に色は無かりし春立てる　前田美恵子

確かに静寂に色は無い。その当たり前に気づくことが、ものごとの本質に迫ることだと思う。〈西行に誘い込まれし花の闇〉、西行になら誘い込まれてみたいんでしょうね。

水といふ畏ろしきもの冬の滝　江島　照美

冬の滝の厳粛さの奥に水の恐さを作者はみている。大津波を見ているのかもしれない。

大空の果ては漆黒梅白し　有松　洋子

太陽の周囲は明るい。しかし、もともと広大な宇宙は闇なのである。それを思うと梅の白さが心にしみる。

節分の鰯やエーゲ海の青　中田　禎子

節分の鰯の青がエーゲ海の青とは、素晴らしい感性。

余白へと雪降り積もる虚も積もる　鈴木　初音

積もっては消えてしまう雪。雪も実は虚なのかもしれない。

引く鶴の声の残れる虚空かな　犬塚李里子

残響と言ってしまうと、詩情を欠くが、鶴の声がまだ聞こえてくるような空。虚空とはそんな感じなのだろう。

さよならは言ひたくないと亀の鳴く　寺田すず江

さよならと言いたくない気持を亀に託したところが俳諧。

踏青や過去礎に今を生く　柴田　靖子

今踏んでいる大地。そういえば、人は過去を礎に今を生きているのだ。

畳替草の匂の熟寝かな　谷岡　尚美

正月を迎える年用意の一つとして畳表を取り替える。新しい畳の匂いの中で熟睡しているという。年用意も中休みといったところか。（以下略）

PDF= 俳誌の salon